

European Society of Cardiology (ESC) Congress 2016 in Rome

初めてのイタリア，そして欧州心臓病学会

矢崎 義行

東邦大学医学部内科学講座循環器内科学分野（大橋）



2016年8月27～31日までの5日間、イタリアのローマで開催された欧州心臓病学会（European Society of Cardiology：ESC）Congress 2016に参加しましたのでその模様を報告します。このESCはアメリカのAmerican Heart Association（AHA）、American College of Cardiology（ACC）と並んで、循環器の世界3大会のひとつであり、主要な大規模臨床試験の結果や最新のデバイス治療報告などが世界に先立って発表されます。そして毎年ヨーロッパの主要国の持ち回りで開催されることもあり、さまざまな国籍の参加者が多数集まる人気の学会で、今年も3万2千人超の参加者を記録しました。

ローマといえば世界中から旅行客が多く訪れ、シンボリック建造物として名高い「コロッセオ」があります。約5万

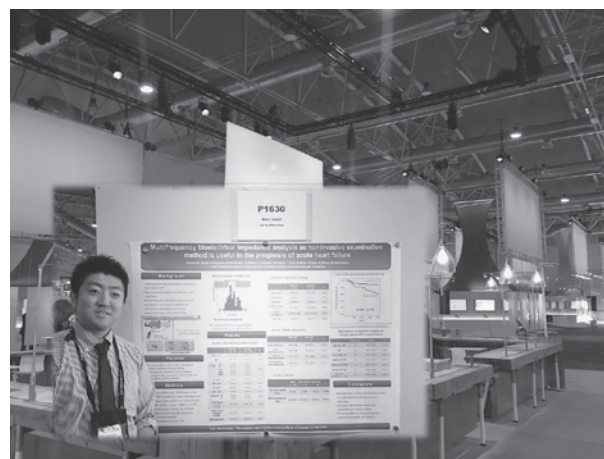
人を収容できる巨大円形闘技場のコロッセオは、ローマ皇帝ウエスパシアヌスが起工して皇帝ティトゥス期の紀元80年に完成しました。夜になると美しくライトアップされ、昼とはひと味違う表情を見せてくれます。

今回ESCが行われた会場はこのコロッセオなどがある都市部から電車を乗り継いで約1時間ほど離れた郊外でした。会場は参加人数が多いこともあり非常に広く、さらに日本ほど湿度は高くありませんでしたが日差しが強く、コンテナ間を移動するだけで汗が噴き出るほどでした。

この広大な会場で学会の目玉となるメイン会場は、バックに広大なコロッセオがプロジェクションマッピングされ、遠くからもわかるような大きなスクリーンがいくつもある迫力のある広大な会場でした。そこで行われたHot



ESCマークのオブジェの前での集合写真。左より循環器内科学分野（大橋）医局員の能戸辰徳先生、新倉寛輝先生、筆者、中村正人教授、池田長生先生、高亀則博先生。



鮮やかな照明されたポスター会場で、ポスター前の筆者。



左上：青空の下での屋外会場。右上：演者の周りを観客が360度囲むセッションで発表される中村教授。左下・右下：コロッセオがプロジェクトマッピングされた広大なメイン会場で発表される中村教授。

Line sessionでは当医局・内科学講座循環器内科学分野(大橋)の中村正人教授が日本におけるステント治療後の抗血小板薬継続時期についての多施設共同試験結果を報告されました。日本の研究成果を世界へ向けて発信し、大きな反響を呼んでいました。翌日のMeet the trialistは国内学会では見かけない非常に面白いスタイルの企画で、Hot Line sessionの発表者と座長を中心として観衆が360度座席を囲む会場となっていました。聴衆と発表者との距離が非常に近い状況で、聴衆も含めて相互的に1時間あまり活発なディスカッションが行われました。中村教授の長時間質疑

応答に感銘を受け、いつか自分もこのような場に立つことを夢見て日々努力し、研鑽を積みたと思いました。

その他の会場もいろいろな工夫がなされており、至るところで鮮やかな色彩の照明が使用され、非常にモダンな雰囲気醸し出していましたし、屋外sessionでは聴衆側にソファークッションが多数置かれ、リラックスした雰囲気の中でディスカッションを行うことができる環境づくりがされていました。

私はポスターセッションで2演題、両演題とも心不全領域の発表で、急性うっ血性心不全患者の体液組成を多周波数生体電気インピーダンス法によって測定し、予後を検討する研究についての発表を行いました。他施設からも心不全に対して生体電気インピーダンス法を用いた研究報告があり、その発表者である先生と意見交換を行うことができ、大変有意義な時間を過ごしました。また、工夫を凝らした着眼点の面白い研究報告に触れる機会が多数あり、今後の臨床研究を進めて行くことに対するモチベーションが非常に上がりました。また、学会の合間の夜には他病院・他施設から現在海外留学されている先生方と夕食をご一緒する機会もあり、海外での生活および仕事内容など、さまざまな話を聞くことができました。海外での生活は日本での生活と比較することで逆に日本のことを再確認する良い機会であり、また自身の思考の視野を広げる良い機会でもあったと感じました。

最後に、出張中の病棟業務や外来業務を代行していただいた医局員の皆様、および循環器内科医局秘書さん、そして、このたび研究指導していただいた中村正人教授に感謝を申し上げます。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2017.r011